



2015・2・3

SORA 59号

福岡 亀井 紀子

崇福寺にて
秋夕焼夫婦寄り添ふ二基の墓

一斉にメール発信開戦日

冬蜂のたどりつきたきところあり

集落の古拙の仏冬ぬくし

足元に猫の絡まる年用意

福岡 樋口 みのぶ

魚屋の鱗まみれや十二月

父親は愚痴をこぼさず稲の花

外灯の影のまあるく雪の上

山宿に門番のごと雪達磨

蜂飼は蜂の機嫌のわかるらし

大阪 田岡 千章

日に透けて熟柿の重くなりにつけり

一徹を矜恃としたり枯蓮

神無月堰に細れる水の音

小春日や胸割り深き観世音

一切火気禁ず寺領の冬椿

熊本 松田 明子

倉田紘文先生は
碑の親しき文字や鳥渡る

八湯になんでも蒸して鴟日和

一之町なくて二之町秋簾

仇討の果たせぬままの菊人形

青空に埋め尽くされし運動会

福岡 あさなが捷

凧や板の間にある棕櫚箒

白鳥の声恐しく暮れにけり

役割りは皆心得て煤払ふ

佗助や語尾やはらかき和紙の里

ころがして角張つてゐる雪達磨

新宮 井浦美佐子

髪荒き子の手しなやか筆始

神棚は長子にまかす年用意

蠟梅や外してもらふ喪の真珠

焼立てのパンの香満つる聖樹の灯

持ち寄りし小さきゼリーとむかご飯

須恵 苑 実 耶

曲乗りの赤き大玉小鳥来る

鶉鳴くや子の眠る間の水仕事

霜の朝父にミルクを沸かしをり

日脚伸ぶ左官の手元見て飽きず

雪もよひ犬の鼻づらなでてをり

大阪 青木 朋子

特等は子が引き当てて恵比寿講

凍雲の軍行橋を圧し来る

改札を出て鯛焼に並びけり

夜更かしの両手の中の葛湯かな

腕枕待ちゐる猫や冬の夜

東京 今井春生

皇帝ダリヤ気ままに向きて咲きにけり

門灯は自動点灯暮れ早し

イヴの夜や一人の多き映画館

砂糖壺に小さき匙や年用意

風花や路上ライブの津軽三味線

山梨 野畑さゆり

歳時記を繕うてゐる小六月

堰の水細くなりたる冬至かな

つつがなき一日大事や初日記

大根引く力抜く技^{すべ}たづねつつ

しんがりをそろそろ進む初詣

福岡 白水良子

剪定をのがれてゐたる帰り花

銀漢やいつも素足のマリア像

烏瓜たぐり寄すれば森動く

乗り換へのホームの釣瓶落しかな

嬰のごと葉付き大根抱き上ぐる

兵庫 石川 叔子

進水の彩なすテープ天高し

糸ぴんと弾き繕ふ夜なべかな

かばかりの日差しを受けて石路の花

辻に立つ地蔵ぬくもる小春かな

言ひたきを胸にたたみて年果つる

北海道 押田裕見子

覚えなき手に払はるる雪婆

ほんのりと点る駅の灯冬はじめ

もう一度会ひたき人へ書く賀状

古鍋も磨ききつたる年の暮

百八つの鐘の余韻の初景色

京都 天谷翔子

振り向きし山羊が笑ひぬ冬日向

木枯や食卓に挽く塩胡椒

からつぽの巣箱に冬日差すばかり

セーターを編んであげると言ひしまま

天狗の面真つ赤鞍馬は雪催

東京 古川夏子

返り花鍵を銜へし狐神

粕漬の魚に焼き目や一の酉

鳩居堂に選ぶ句帳や日の短か

芽柳や空き地ぽつかり夜の銀座

深川の遣らずの雨や寒椿

福岡 吉村摂護

清貧の父の南部の湯気立ちて

雪女郎懐中電気持たせやる

熱爛やほのともどりし俺おまへ

訪問の鍼医が帰る夕時雨

冬海鰻の頭が切り裂けり

東京 遠山のり子

山葡萄のんびり戻る牧の牛

水際の枯葉重なるばかりなり

マンシヨンの横は農園小春かな

山茶花やポケットにあるハーモニカ

築山の祠も詣で寒牡丹



空作品抄
柴田佐知子抽出

冬座敷母の遺影の加はりぬ

神宮の鳩くる街に暦買ふ

冬銀河街は淋しき人ばかり

ほそほそと火を養へる冬至かな

青空に貼りついでゐる冬もみぢ

去年今年この世疲るることばかり

燃えしふる大注連縄を裏返す

車よりまづ杖降りて二月の野

寒卵割ればひとりの音がする

水鳥の喧嘩売ること飛び立てり

雪達磨作りて母を呼んでをり

猪の住みつく山を相続す

まどろみの色となりゆき葦枯るる

男ひとり恋に死なせてどんどの火

高倉 和子

中田 みなみ

荒井 千佐代

服部 早苗

柴田 志津子

だいじみどり

野 上 杏

深川 淑枝

矢野 百合子

小林 朱夏

秋 千晴

田代 貞枝

原 友子

吉田 菫



水平線のみが濃かりし冬の窓

一斉にメール発信開戦日

魚屋の鱗まみれや十二月

日に透けて熟柿の重くなりけり

白鳥の声恐しく暮れにけり

蠟梅や外してもらふ喪の真珠

凍雲の軍行橋を圧し来る

風花や露上ライブの津軽三味線

雪女郎懐中電気持たせやる

山茶花やポケットにあるハーモニカ

焼芋を割つて不幸は考へず

霜降りし朝のしづけさ死後に似て

灯のともり押絵膨らむ羽子板市

狐火に混じりてをりし獣の眼

老いなんぞ花野の隅に捨てたと

新雪に手形足形人の形

鳳 蛮 華

亀 井 紀 子

樋 口 みのぶ

田 岡 千 章

あ さ な が 捷

井 浦 美 佐 子

青 木 朋 子

今 井 春 生

吉 村 摂 護

遠 山 の り こ

原 友 子

戸 栗 末 廣

松 田 明 子

山 本 則 男

織 田 高 暢

苑 実 耶

鶏頭花供へ斬首の話など

聖夜劇顔より大き星かむり

ストーブの前を陣取る男かな

あたたかや靴の散らばる珠算塾

雲くれば影を流して山眠る

寒声の前のめりなる太夫かな

富士の雪吹き飛ばさるる鳥総松

冬支度終へたる家へ母招く

かいづぶり己が水輪の外へ浮く

寒の水手足細りて恙なし

着ぶくれて純愛小説読みふける

熟れてゆく柚子ごと家屋明け渡す

日向ぼこ母に老けたと言はれたる

住み古りて此抛がふるさと年迎ふ

大白鳥また旅人に見つめらる

大寒に生れし子と逢ひ父となる

栗原京子

天谷翔子

押田裕見子

山内 碧

田中とし江

田邊 豊子

野畑さゆり

林 徹也

森 俊人

ふじの茜

山田 正子

小川 涼

宮井知英

石川 叔子

白水 良子

小谷 一夫



吹雪いてよ恋は幾重の誤認より
咳の子をさする母の手魔法の手
湯婆にゆつくり届く母の足
神の留守海底火山マグマ噴く
高々と熊手持ちあげ抜け出せり
初詣帰りは屋台に誘はれて
鰯雲土偶五体に会ひに行く
一筋の光は川ぞ雪野原
冬薔薇ひとりぐらしのひとりごと
争はぬ二人となりぬ木の葉髪
野仏も路標の一つ草紅葉
風琴に聖夜の星の揃ひたる
不夜城の神戸を抱きて山眠る
着ぶくれし背中を妻に見られをり
猫の子のちらばつてゐる日向かな
矢印の雪の捨場は日本海

乾 有 杏
仲 里 奈 央
横 田 敬 子
えとう樹里
遠山のり子
後藤園子
古川夏子
清水量子
上川いつ子
酒井みち子
片田きく
山口弘子
橋本知笑
井上義郎
森 真 二
中 田 光

空作品評

柴田佐知子

車よりまづ杖降りて二月の野

深川 淑枝

お歳を召された方が車から降りられるところの写生である。九十三歳の私の母も全くこの通りで、車の扉があくと杖が出てきて、それからもじやもじやしながら母が出てくるのだ。見ていながらこのように詠みとめることができなかった。地に降りる杖：そして広がる二月の野。見事な景の展開である。作者は平成二十三年度の俳壇賞受賞作家。

寒卵割ればひとりの音がする

矢野百合子

冬薔薇ひとりぐらしのひとりごと

上川いつ子

一句目、寒い朝だろうか。コツンと卵を割る。それをへひとりの音」としたとで、そのあとにはしいんとした空間が残る。

二句目、へひとり」の繰り返しが、あたかも独り言のような効果をあげている。ともにへひとり」の実感が音や声など聴覚を通して捉えられた作品。

猪の住みつく山を相続す
熟れてゆく柚子ごと家屋明け渡す
田代 貞枝
小川 涼

一句目、都市に住んでいる方が、親族の遺産を相続されたのだろうか。それも猪が駆け回る山である。さてどうしたものかとやや戸惑っておられるのではなからうか。へ猪の住みつく山」の措辞に可笑しみがある。二句目、こちらは手放されてゆく家。この家で穏やかな暮らしを象徴するようなへ熟れてゆく柚子ごと」。この一点に焦点を定めたことで、思い出の詰まる家への作者の思いが際立ってくる。

灯のともり押絵膨らむ羽子板市
松田 明子

歳末に立つ羽子板市の光景。押絵は厚紙に羽二重の布をかぶせ、中に綿を入れてくるむ技術で、歌舞伎役者の顔など描いたもの。へ膨らむ」という措辞によつて灯がともった瞬間、陰影を濃くして、より立体感を得た押絵羽子板が華やかに見えてきた。一つのものが、灯がともる前と後とで異なって見える。明子さんはここを見逃さず間髪を入れず作句されている。

〈以下略〉

空集

柴田佐知子選

甲高きこゑより生まれ寒卵

海辺まで信号一つ冬ぬくし

冬晴やおのづ五指組む天主堂

遊ぶごとパン奪ひあふ冬雀

敷藁を替へし神馬に年移る

十方の神さま称へ手毬うた

つくし野の空が灘へと若菜籠

竹馬に乗りて父より高くなる

紙風船しぼむことなく忘れらる

年の市荷物両手にまだ覗く

クリスマスソングの中の縄のれん

黒板も水拭きをして年迎ふ

煮凝や一人暮しの長き母

裸木や祭のやうに鳥遊ぶ

ガラス戸に鼻を潰して雪を見る

白息を吹きかけ船を押し出せり

引越しの荷の落ちつきて豆を打つ

焼芋を割つて不幸は考へず

揉みくちやの落葉プールへ子を放つ

冬田道アンパンマンのバスが来る

着ぶくれて己れの映るものは見ず

倦怠も嫉妬もすこし毛糸編

極寒や解体ショーの大鯰

霜降りし朝のしづけさ死後に似て

枯れ初めて人間臭き箒草

日向ぼこ母郷に似たる山に向き

千葉 原

友子

兵庫 戸栗末廣

福岡 柴田志津子

粕屋 秋 千晴

糸島 小林朱夏